人と環境 Vol. 12: 77－85 (2019)

【論　文】

「なぜ図画工作を学ぶのか」についての一考察
－小学６年生が探究した図画工作の意義を通して－

東本 康栄*

大阪信愛学院短期大学

Human and Environment Vol. 12 (2019)

One of the Consideration on "Why to Learn the Art Class" in Elementary School
－ Through the Meaning of Art Class Explored by 6th Graders －

Yasue Higashimoto

Osaka Shin-Ai College, Japan

図画工作科は、児童たちに「好きな教科」だと好意的に受け止められているが低学年が好む傾向が強く、6年間という小学校の中で、好きな教科からそうではなくなっていく現象が起きている現状である。その原因が、教員・児童たちの図画工作をなぜ学ぶのかという実感への意識の弱さと関係しているのではないかと考えた。そこで本研究では、小学５～６年にかけての２年間試みた「なぜ図画工作を学ぶのか」という探究授業の実践やアンケート結果を通して児童たちがこの教科で何を学んだのかを考察するとともに、この教科の在り方を考えていくことにした。その結果、児童各々がこの教科の中で何を学んでいるのかを常に模索し考えて活動することで、教科に対する学びの意識が高まることが分かり、アンケートの結果にも表れた。令和２年度からの新学習指導要領全面実施を目前に控え、私たち指導者は「作品ありき」から「児童ありき」という視点で、どのような資質・能力が児童たちに育つのかを考えた美術を通しての人間教育を基にした教科であると捉え直す必要がある。そして、何を身につけさせたいのかを想定した上で創造する楽しさの質を高められる題材と児童たちの学習過程に重点を置いた授業展開が求められ、作品主義や放任的な授業から脱却する指導への意識改革が問われている。

キーワード：図画工作・図工観・指導観・探究・小学６年生

１．はじめに

新学習指導要領が平成29年に告示されたが、その改訂の過程において中央教育審議会答申（平成28年12月21日）の中では、芸術系教科・科目をなぜ学ぶのかという実感が、教員・子供たちの意識として弱いのではないかという指摘がなされ、指導の改善・充実を図ることが求められた[1]。また時を同じくして、現役公立中学校の美術教師から「図工嫌いが6～7割の状況で中学校に入学している。美術の授業は図工嫌いを払拭することから始まる」という話を聞き、当時小学校で図画工作を教えていた自身としては、そのような状況に大変驚いたと同時に「私も図工嫌いを育てているのかもしれない」という複雑な気持ちにもなった。以前から毎年小学６年生に「なぜ図画工作を学ぶのかな？・

*大阪信愛学院短期大学子ども教育学科
〒536-8585　大阪市城東区古市 2-7-30
E-mail: higashimoto@osaka-shinai.ac.jp

受付：2019 年 9 月 23 日　受理：2019 年 10 月 5 日

©2019 大阪信愛学院短期大学

どうして図工という教科があるのかな？」という探究題材を実践してきた。しかし、先述した内容を受けて、授業へ向かう意識を高めていくために、もう少しじっくりと図画工作を学ぶ意義を児童たちに探究させる必要があると考えた。そのため、平成29年度は同じ内容を小学５年生からの２年間という長期的な探究授業を試みた。

図画工作という教科は、学研総合教育研究所の小学生白書web版（2018年度）[2]によると、児童たちに「好きな教科」だと好意的に受け止められているという調査結果（国語と並び「好きな教科2位」）である。しかし学年別で見ると低学年が好む傾向が強く、５・６年になると数値が極端に減少していることが分かる。6年間という小学校の中で、好きな教科からそうではなくなっていく現象が起きている現状であり、先述の現役公立中学校の美術教師の話しと合致する。

この調査結果から小学５・６年になると好きな教科としての数値が極端に減少する原因が、先述した中央教育審議会答申にあった「なぜ図画工作を学ぶのか」という実感への児童たちの意識の弱さが関係しているのではないかと考えた。また教員の意識の弱さとして、教科観のつかみにくさや曖昧さが起因していると考えられる。これについて、鳥原正敏（2017）は「数値化したり形として見比べたりすることができない「心」の動きに関することが目標であること」[3]、石川秀香（2017）は「主として材料や用具類を取り扱うために、どうしても体験主義に基づく技能指導に教育の力点が傾いてしまい、そのことが教科観を一層分かりづらいものとしている」[4]との指摘がある。さらに、井ノ口和子（2018）は「学校教育現場における「作品主義」への批判的見解や脱却の必要性が述べられて20年以上経った現在でもこの教科観の課題が解決されたとは言えない現状がある」[5]とも述べている。このように、材料や道具を扱うことが教科の特性の１つだが、それに偏りすぎて制作物の出来栄えばかりに目を向けてしまい、目には見えない心の働きや育みがおざなりになってしまっていると捉えることができる。

したがって、図画工作を指導するにあたって根幹である「なぜ図画工作を学ぶのか」を指導者が捉え直さなければ指導の改善・充実は図れず、子供たちの意識の弱さも改善されないのではと考えた。

そこで本研究では、今回児童たちに試みた探究授業の実践やアンケート結果を通して、児童たちが図画工作で何を学んだのかを考察するとともに、新学習指導要領の中で示された図画工作科における「主体的・対話的で深い学びの実現」を踏まえながら、これからの図画工作科の在り方を考えていく。

研究対象とした児童は、自身が図工専科として２年生から６年生の５年間を受け持った児童たちである。受け持った当初は、何事にも真面目に取り組むが、全体的におっとりとしていた。授業に対しては、つくることへの課題を終わらせたような、そしてその速さを求めてしまう児童も少なからずいた反面、「ここはどうしたらいいですか？」と第３者に答えを委ねるような質問もよくしてきた。そのため、自分の思いを表し、つくりだす喜びを実感できる題材に取り組めるようにし、題材ごとに活動を通しての振り返りをプリントへ記入していくことを行ってきた。その結果、４年生の２学期頃から授業に向かう集中力が増し、活動へ意欲的に取り組む姿勢が感じられるようになった。

２．研究方法

2.1. 研究対象の概要

研究対象校：S 小学校（大阪府内）
対象学年：小学校 6 年生　35 名
対象期間：平成 29 年度～平成 30 年度
（小学 5 年～6 年の 2 年間）

2.2. 児童たちの探究手順

第１次：（小学５年生・１学期）
図画工作という教科がなぜあるのか・何を学ぶのかを考えていく意識を持つ（意識付け①）

第２次：（小学５年生・３学期）
５年生の１年間の図工の授業を通して考えた意見を出す（中間報告）

第３次：（小学６年生・１学期）
中間報告を整理し「なぜ図工を学ぶのか」の理由を考える意識を持つ（意識付け②）

第４次：（小学６年生・３学期）
「なぜ図工を学ぶのか」について考えをまとめる・アンケートへの回答

３．授業実践と結果

3.1. 第1次：（小学5年生・1学期）「なぜ図工を学ぶのか」への意識付け①

文部科学省では、５・６年生の図画工作の授業配当は年間 50 時間となっている[6]。４年生が年間 60 時間であるため 10 時間の減少である。このことを５年生の最初の授業時に伝えた。すると児童から「えー、減るの？」「何で減るの？」と大きな声が上がった。授業が減ってしまうことを残念に思う児童が多い印象が伺えた。そこで「５年生で増えた教科があるよ」と問いかけてみると「家庭科が増えたからだ」と口々に答え、図画工作の授業が減ることに納得したようだった。そして本題である「みんな、どうして図工の授業があるのか、考えたことはありますか？図工で何を学ぶのかを考えたことはありますか？」と問いかけた。児童たちは無言となり考え

始めたが、すぐに答えるような反応はなかった。そこで、「卒業までの２年間それぞれが制作や鑑賞活動を通して考えを出してみよう」と提案した。手始めに、今現在考えた答えを書かせてみたが、児童たちにとってはいきなりの質問に対して困惑している様子だった。書かせた内容も当然ながら「表現力をつけるためかな」「自分の気持ちを表すためかな」「友達と協力して１つの作品をつくりながら仲良くなっていくことかな」「今はまだ思いつかない」といった明確な自分の意見を出せない状況だった。けれども、これから「なぜ図工を学ぶのか」という意識を持って表現・鑑賞活動に臨む児童たちが、今後どのような答えを導き出していくのかに期待した。

これまで児童たちには、題材毎に行う振り返りをプリントに記入していくことを実践させてきたが、それとは別に新たに「制作プリント」も実践させていくことにした。これは、題材毎に制作の見通しが立てられる計画表や授業毎の簡単な振り返り、制作から作品鑑賞までを幾つかの項目に分けた自己評価表を盛り込んだプリントである。このプリントを導入し、制作・作品鑑賞後に自己評価を行う取り組みをこの 1 年間試み、授業や題材に向かう自分を客観的に見つめることで、図画工作への意識が高められるのではないかと考えた。

3.2. 第2次:（小学5年生・3学期）「なぜ図工を学ぶのか」中間報告

５年生の図工の授業最終日に、１学期最初に問いかけた「なぜ図工を学ぶのか」についての中間報告を行った。方法は、正方形の付箋へ表現・鑑賞活動を通して考えた自分の意見を短い文章やキーワードを書いて模造紙に貼っていき、友達と意見が重なっても構わないので１人１枚以上は記入することとした。その際、理由までは書けなくても良いので、この１年間で記入した振り返りプリントや制作プリントを読み返しながら考えたことをひとまず出してみることを伝え、１枚の付箋に１つの考えと誰の意見かが分かるように名前を書き、記入し終えるごとに模造紙へ貼りにくるようにさせた。

30 分ほどの時間を設けたが、自分の意見を明確に出せなかった１学期の頃とは違って次から次へと自分の意見を書いた付箋を貼りに来る児童の姿があった。模造紙に付箋を貼る時に、すでに貼られた友達の付箋の内容を見て共感しながら席に戻り、また自分の意見を出そうと考える良い連鎖反応が起こっている様子を感じ取れた。意見を出し終えた頃、自然と児童たちが模造紙の周りに集まり、自分たちが出した意見を見ながら「こんなにたくさんの意見が出てすごい！」「〇〇さんと私は同じことを考えていたんだ」「〇〇さんのような意見は考えつかなかったな」といった会話が弾んでいた。付箋を貼り付けた模造紙は、児童たちがいつでも目にすることができるように図工室で１年間掲示することにした。

表１　５年生の１年間の図工の授業を通して考えた「なぜ図工を学ぶのか」（中間報告）

上位 10 点（複数回答）

① （材料などから）想像力やアイデアを高める・豊かにする…**４３**
② 制作活動を通して自分の思い（自分らしさ）を表す・伝えるため…**３６**
③ 協力する力を身に付ける（協力し合うことでそのお友達の良さを知る）…**２２**
④ 新しい道具や材料と出会い、技術を学ぶ…**２１**
⑤ 集中（夢中になる）力を身に付ける…**１７**
⑥ （計画や方法などを）考える力を身に付ける…**１２**
⑦ 達成感、嬉しさ・楽しさを感じる…**１１**
⑧ 鑑賞する（鑑賞を通してその人の思いを汲む）力を身に付ける…**９**
⑨ 自分の内面を知るため…**８**
⑩ 感じる力・感性を豊かにする…**６**

少数意見

・個性を生みだすため…**３**
・生活や将来に生かすため…**２**
・様々な教科で得た知識と合体させて表す…**２**

36 名の児童が考えて書いた付箋の枚数は 200 枚あり、意見をまとめると表１に示す結果となった。

「想像力やアイデアを高める・豊かにする」が一番多い回答となり、全体の 20%を超えるものであった。児童たちが活動を通して学んだ、または学びに必要だと実感したものが「想像力」だったことが分かる。「自分の思い（自分らしさ）を表す・伝えるため」（18%）が二番目に多く、続いて「協力する力を身に付ける」（11%）、「新しい道具や材料と出会い、技術を学ぶ」（10.5%）が上位の回答となった。上手に表すことよりも、自分の思いを表し伝えることや個人活動だけでなく友達と協力して成し遂げることが重要だと考えたことが伺える。また、「新しい道具や材料と出会い、技術を学ぶ」は、材料・道具・技術への好奇心の表れとも感じ取れる。「感性」という言葉は授業内で使ったことはなかったが、そのような言葉を知っていることに驚かされた。

少数意見はたくさんあったが、目を引いたものが上記の３点だった。「個性を生みだすため」は、自分というものを生みだす—自分を創造する、そのような児童の思いだとも取れる。「生活や将来に生かすため」「様々な教科で得た知識と合体させて表す」の２つは、図画工作の授業の枠を超えて役立つものがあるという視点が育ち始めていることが伺える。

材料と出会い自分の思いを形に表すことを道具の扱いや技術と共に楽しみ、その表したものを鑑賞することで思いを汲み取ること、そしてそれらの活動を通して様々な力を身につけていくことだという、図画工作科が

目指す事柄を児童たち自身が自ら気づけていると捉えられる結果であった。

3.3. 第3次：（小学6年生・1学期）「なぜ図工を学ぶのか」への意識付け②

６年生の最初の授業では、５年生で行った中間報告での意見を整理しながら、児童たちが考え出した答えがすべて「図画工作を学ぶ意味（意義）」に当てはまっていることを伝えた。そして次のステップとして、それらの理由をこれからの活動を通して導き出していくことがこの１年間の目標だと示した。そして、図画工作の授業には表現・鑑賞を行う活動だけでなく、その活動の中には様々なものが詰まっていることを話した。「なぜ、みんなが考えた様々な力を身につけていくのか？それは、人間に備わっている宝物（＝能力）だからだと先生は思うけど、みんなはどう考えるかな？答えは１つではないと思うよ。」と児童たちへ問いかけ、これからの活動を通して答えを導き出すためのポイントにしてほしいと話した。

さらに、題材を終えるごとに行ってきた振り返りを記録するプリントへ、新たに「活動を通して何を学びましたか？それをどのように生活の中に生かしたいと考えますか？」という項目を加えた。授業で自ら得た学びをどのように生活に生かしていくかを考えることで、「なぜ図工を学ぶのか」という意識や視野がさらに広がると考えたからである。

3.4.1. 第4次：（小学6年生・3学期）「なぜ図工を学ぶのか」について考えをまとめる

小学校卒業を目前に控えた児童たちが「なぜ図工を学ぶのか」について答えを出す時がきた。まずは自分の意見をまとめ（約 20 分）、次に座席を基にした３～５名のグループの中で話し合い、必要に応じてキーワードを設定しながらまとめ、それを模造紙の半分の大きさの用紙に自由に書き表した（45 分×３回）。そして発表を行い、最後にアンケートを実施した。

以下は、グループでのまとめ・個人の意見・無記名でのアンケートの結果である。

中間報告で一番多かった回答「想像力」に関して、９グループ中８グループが理由を述べている。**A・Gグループ**は「想像力」とは「楽しさ（む）」から生まれるとし、**Eグループ**は活動の過程で予測することなどで高められるとし、表現・鑑賞活動の両方で必ず使用するものだとしている。**Cグループ**は想像する行為を経て「想像力」は「知識」「自信」「考えること」で成り立つと考え出し、それが日常生活に生かせるものだとしている。**F・H・Iグループ**は自分（たち）の作品をより良いものにするためには「想像力」が必要だとし、**Iグループ**は加えて、それが将来に役立つからだとしている。

Bグループは中間報告で二番目に多かった「自分らしさ」に関して、自分自身を振り返り自分を見つめる大切さを学んだ様子が伺える。この**Bグループ**と**Dグループ**は、５年の中間発表では僅かな意見であった「心」という言葉が入る共通点がある。

「生活や将来に生かす」は中間報告では少数意見であったが、最終報告では９グループ中３グループの**C・D・Iグループ**が記載していることから、少数意見ではなくなったようだ。下記にある個人の意見でも**ア・イ・オ**が述べている。

《個人の意見》

ア：「自分らしさ」を表現することは、自分の性格や特徴を知ることにつながると思います。自分自身を知ると、自分の世界が広がって見えると思います。中学生になっても、この世界に１人しかいない私を大切に「自分らしさ」を表現したいと思います。

イ：人はみんな性格・特徴がちがうので、それぞれ個性のある作品ができて鑑賞するのが楽しいと思いました。大人になっても人それぞれ個性があることを大切にして生きていきたいです。

ウ：人間に備わった感情や思いをアウトプットする能力で物を作り表現するのが図工だ。

エ：何もないところから、足したり引いたりして自分の気持ちを表現し、想像力を育て、作品ができた時の達成感を学ぶ。

オ：想像することで、良いアイデアが浮かぶ。これを「ひらめき」という。ひらめくことで、自分の意見が変わったり、今やっている作業がもっと良くなったりと何かを始めるきっかけがつくれた。そういうひらめきを多くするために、私は図工があると思う。これから社会に出る私達に必要な「ひらめき」を身につけるために…

カ：自分で考えることができるようになるための思考力を学んだ。小さい頃は、人に教えられたことを実行するだけだった。今は自分で考えたことを実行することが大切だと分かった。

ア・ウ・エ・オ・カは表現活動を通して、**イ**は鑑賞活動を通して学んだ事柄である。

ア・イは価値観を構築した表れが述べられている。**ア**は自分の価値を見出した様子が分かる。授業を通して自分と向き合うことで自分を知り、そこから視野を広げられると感じたようだ。何より、自分という存在を大切にしていきたいという思いがある。**イ**は同じ題材に取り組んでも様々な作品が完成するが、それを個性と捉えて楽しく鑑賞した様子が伺える。人それぞれの違いを大切にしていくという価値観を学び取っている。

ウ・エは、創造力を学び取った様子が伺える。人が持つ感情や思いを、**ウ**は「もの」を媒体として生み出し表現していくことを、**エ**は「無」から想像力を育みながら生み出し、達成感を得ることを述べている。

オ・カは、自分の成長を感じ取っている。**オ**は、これからの未来に必要な「ひらめき」というものを身につけることができたとし、**カ**は受動的であった自分の過去から「思考力」を身につけ、自分の考えで行動することを学んだことが分かる。

したがって、6年間の授業を終えて導き出した理由をまとめると「自分にとってより良いものをつくりあげようとする創造力やそれに必要な力を身につけることを楽しみ、自分と向き合ったり友達と交流し合ったりする中で、人として大切にしたい思い（価値観）に気づけること、そして図画工作で身につけた事柄は将来にも役立つものだ」という結果となった。

3.4.2.　第4次：（小学6年生・3学期）図工に関するアンケート結果（回答数 35 名・無記名）

①６年間の図工について、もの作りなど表すことが

とても楽しかった	20 名	57%
楽しかった	15 名	43%
あまり楽しくなかった	0 名	0%
楽しくなかった	0 名	0%

〈楽しかった理由〉上位４点
・自分の気持ちを表せた/伝えられたから…12 名
・作品（もの）づくりが好きだから…10 名
・初めての材料や道具を使えたから…4 名
・夢中になれたから…3 名

「とても楽しかった」が半数を超え約６割である。自分の気持ちを表せた/伝えられたことが楽しさに繋がることが伺える。また、小さい時から作品（もの）づくりが好きだったからという理由が中にはあり、それが小学６年まで続いていることを示している。

②６年間の図工について、作品交流や鑑賞が

とても楽しかった	15 名	43%
楽しかった	18 名	51%
あまり楽しくなかった	2 名	6%
楽しくなかった	0 名	0%

〈楽しかった理由〉上位４点
・自分と友達の思いを理解し合ったり共有しあったりすること…10 名
・友達の工夫を知ることができたこと…9 名
・意見交流することで自分が考えもしなかったことを知れたこと…6 名
・交流することでコミュニケーションが図れたこと…3 名

〈楽しくなかった〉
・友達の作品をじっくりと見る時間が少なかった…1 名
・交流するよりも何かをつくりだしたい気持ちが強かった…1 名

作品交流や鑑賞も制作活動に続き楽しかった様子が伺え、理解し合ったり共有しあったりと「もの」を媒体としてコミュニケーションを図ることが児童たちには必要だということ分かった。しかし「あまり楽しくなかった」という児童も２名いる。じっくりと見て鑑賞するには時間が少なかったことが伺える。

③図工が

好きだ	29 名	83%
きらいだ	0 名	0%
どちらでもない	6 名	17%

〈好きな理由〉上位４点
・絵を描くこと物をつくることが得意/好きだから…12 名
・自分の思いが伝えられたから…8 名
・様々な材料や道具を使えたから…6 名
・達成感や満足感を感じられたから…4 名

〈どちらでもない理由〉
・楽しい時もあったので、きらいではない…3 名
・思い通りにいかない時もあったから…2 名
・好きか嫌いではなく、多くのことを学べたから…1 名

「きらいだ」との回答はなく、全体で８割超す児童が「好きだ」と回答している。児童たちは、創造していくことが好きだということよく分かる。しかし、思い通りにいかなかったことが好きではないにつながることが伺える。

④図工の授業の中で達成感や満足感を感じることが

できた	32 名	91%
できなかった	3 名	9%

〈できた理由〉上位３点
・色々と悩んだり考えたりした後、“できた”と感じられたから…12 名
・（授業が終わる度に）自分で頑張ったと感じられたから…10 名
・友達から嬉しいコメントやアドバイスをもらえたから…3 名

〈できなかった理由〉
・作品が思い通りにできなかったことが多かったから…3 名

「できた」が全体で９割超し、試行錯誤した後や、やり切ったという実感から満足感・達成感が得られることにつながる。「できなかった」は上記③と同様に思い通りにいかなかったことを挙げている。図画工作の好き・嫌いは満足感・達成感に比例する状況だということが伺える。

⑤図工という教科が小学校に

必要	34 名	97%
必要ではない	1 名	3%

〈必要な理由〉上位５点
・表現力や想像力を身につけるため…10 名
・(表現活動の中で)達成感や楽しさを味わうため…8 名
・（表現・鑑賞活動の中で）自分の考えを深めて伝えるため…5 名
・自分の気持ちを表したり引き出したりするため…5 名
・自分や友達の作品から意見や気持ちを知るため…4 名
〈必要でない理由〉
・想像力などは国語でも行えるから…1 名

１名を除き「必要」だとの回答である。「必要」とする理由として、「表現力や想像力を身につけるため」に続いて「達成感や楽しさ」を挙げている。上記①～④の回答率や理由を踏まえると図画工作を学ぶにあたり「楽しさ」・「達成感・満足感」が１つのポイントになることが伺える。残念ながら１名の児童は「想像力」は他教科でも行えるとの理由だが、図画工作の特徴でもある「もの」を通して学ぶということが捉えきれなかったようだ。

４．考　察

4.1. 授業実践・結果からの考察

これまで「なぜ図画工作を学ぶのか」について、事例として小学５年から６年の２年間をかけて児童たちが探究した授業実践やアンケート結果を取り上げた。これらから児童たちが図画工作の授業から何を学び、どのように捉えたのかを考察していく。

中間報告・探究結果で多く出ていた言葉「想像力」は、自身の授業内での口癖「考えましょう」からなのではと考えた。児童たちはこの「考えましょう」を「想像する」と受け取っていたのだろう。自身にとっては「考える」には、思考力・発想力・想像力・選択力・判断力・自己解決力を含み、それらに気づいてほしいという期待の言葉であった。そこに気づいていたのが**H・Iグループ**だった。だが、「想像力」について持論を展開した**Cグループ**は「自分の考え・判断で、自分に自信を持つために想像することを学んだ」とし、**Eグループ**も「どこをどうしたらどうなるのかなどを考えることが多く、想像力を高めることができた」としているので、そこには判断力や思考力が含むと解釈できる。つまり、児童たちの「想像力」という言葉には、身につけた（身につけようとした）様々な力が含まれていると推察でき、授業での活動を通して様々な力を実感したことが分かる。

「ひらめき」という言葉が**Aグループ**の表の中や個人の意見**オ**で出てきている。この言葉は４年生の２学期ごろから、児童たちが授業内や振り返りプリントでよく使うようになっていた。児童たちに「ひらめき」がいつどのような時に起こるのかを尋ねてみると「一生懸命やっているけど上手くいかないなと思いながら、どうしたらいいのかを考えている時に頭の中で突然生まれてくる」という答えが返ってきた。試行錯誤する中で「ひらめき」＝発想の転換を行うことでより良いものが創造していけること、これはまさに新学習指導要領解説の図画工作科編にも示されている「つくり、つくりかえ、つくる姿」[7]である。造形的な資質・能力を自然に児童たち自身で学び取り身につけられたといえる。

低学年から「上手く描く（作る）」のではなく、題材やそのねらいに沿って「自分なりの答え」を探す活動を指導してきたが、５年からは「自分の思いを表す」ことに重点を置き、自分と向き合い自分の思いや気持ちを表す題材を積極的に取り入れた。その結果、**Bグールプ**はキーワードに「自分らしさ」を挙げ、授業を通して「自分の心を探し出した」とし、**Dグループ**もキーワードとして「心を育てる授業」と挙げ、鑑賞活動を通して気持ちや考えを汲み取り、表現活動では自分らしさが必要だとしている。これらの意見は、自分の思いを表すために自分と向き合い自分の心の動きを捉え、鑑賞活動では友達の作品などからその思いを汲み取り、共感したり新たな発見ができたりしたからだといえる。

アンケート結果から、先述した通り「楽しさ」・「達成感・満足感」が図画工作への意識を高められる１つのポイントだと考えられる。表現活動において創造していく過程で、児童各々の中に「このようにしたい」というイメージと意識があり、その実現のために様々な力を駆使しながら試行錯誤を繰り返し「できた・頑張った」と実感することで「達成感・満足感」が生まれる。それがやがて自信や「楽しさ」に変わり、また次の学習（題材）へとつながるという循環が起きる。**Aグループ**が「何事にも楽しいと思うことで…」と述べ、**Gグループ**もキーワードに「楽しむ」を挙げ「作品をつくっている間は時間を忘れてしまう」ほど、夢中になったと述べているように、児童たちは試行錯誤を繰り返す経験を重ねていきながら図画工作ならではの創造する楽しみを知っていったのである。

このように、児童たちが「なぜ図画工作を学ぶのか」について、個人としてグループとして導き出した答えは、授業内の活動を通して深く考えられたものであった。この２年間で格段に成長したと探究結果から感じる。したがって、児童たちに図画工作の意義を問い、授業内での活動を通して探究させることによって、児童各々がこの教科の中で何を学んでいるのかを常に模索し考えるようになり、教科に対する学びの意識が高まることが分かった。それはアンケート結果の数字にも表れている。

4.2. これからの図画工作の在り方について

小学校での図画工作科について、福田隆眞は「直接的には美術の内容を扱っているが、目的は美術を通しての人間教育である。」[8]とし、岡田京子は、子供たちは図画工作の活動を通して様々な資質・能力を発揮するが、これは図画工作以外の時間や大人になっても活用できるものであり、それを育成していく過程ではその他の多

様な力も育成されると述べている[9]。これらについては新学習指導要領の図画工作科の目標でも明示している。さらに先述の探究結果でも、児童たち自身が授業内の活動を通して様々な力が身についたとし、それがこれからにも役立つとも答えている。したがって、図画工作の目的が「作品をつくるだけ」「技術的に上手い作品をつくらせる」「完成した作品だけで評価を下す」といったことではないのが明白である。

しかしながら、阿部宏行は「絵がかければよい、作品ができればよいという指導が未だにあることが図画工作科の課題だ」[10]と指摘している。この課題克服への鍵となるのが、新学習指導要領で示された図画工作科における「主体的・対話的で深い学びの実現を図る」ことであると捉えられる。この実現に向けた授業改善の１つに先述した川口の教科観の課題と同じく大泉義一も「作品主義」を挙げ、失敗なく見栄えのよい作品を完成させる活動でなく、「主体的・対話的で深い学び」を通して児童の人間性や思いやりやその子なりの感じ方考え方を重視し、試行錯誤や行きつ戻りつを伴った学習過程やそれを通して何が身に付いたかという観点の重要性を述べている[11]。つまり、私たち指導者は「作品ありき」から「児童ありき」という視点で、どのような資質・能力が児童たちに育つのかを考えた美術を通しての人間教育を基にした教科であることを捉え直し、児童たちの学習過程に重点を置き、作品主義や放任的な授業から脱却していかなければならないのである。

そのためには児童の実態を観察して捉え、興味・関心が持てる魅力ある題材を設定する授業づくりが必要となる。研究対象とした児童たちを指導したこれまでの５年間の授業の中で、題材設定と児童の興味が合致し受動的ではなく主体的に題材と向き合い、創造することに浸り始め集中力が増し、ある瞬間を境に目がキラキラと輝き出すことが度々あった。阿部宏行が「本当に子どもが熱中している場面にはきっと何かしらの資質・能力が働いており、それが深い学びに繋がっている」[12]と述べるように、自身もキラキラと光る児童たちの目を見て、児童各々が自分にとって必要な何かを今まさに学んでいるのだと感じられ、その姿を目にする時がとても嬉しかった。そして、そのような授業後の児童たちからは「疲れたけど、楽しかった」「難しかったけど、楽しかった」「大変だったけど、楽しかった」といった言葉を口にすることが多かった。大泉義一は、そのようにつぶやく子供の声に、試行錯誤しながらも自分のイメージをもち意味や価値をつくりだすことに喜びを感じられるような授業づくりの具現を見ることができるのではないだろうか[13]と述べている。したがって、何を身につけさせたいのかを想定した上で創造する楽しさの質を高められる題材と児童たちの学習過程に重点を置いた授業展開やその環境づくりがこれからの図画工作には求められ、その指導への意識改革が問われているのである。

５．おわりに

児童たちに図画工作の意義を探究させることによって、自分の将来に役立つ必要な力を楽しみながら創造していくことで身につけられたこと、そして自分なりの価値観を構築することができたとの答えを導き出した。児童各々がこの教科の中で何を学んでいるのかを常に模索し考えることで教科に対する学びの意識が高まり、６年間という小学校の中で、好きな教科からそうではなくなっていく現象にはならなかったことが分かった。それはアンケートでの「図工が好き」が８割を超え「図工が嫌い」が０％という数字にも表れた。

令和２年度からの新学習指導要領全面実施を目前に控え、私たち指導者は「作品ありき」から「児童ありき」という視点で教科観を捉え直す必要がある。そして、児童たちの学習過程に重点を置いた「主体的・対話的で深い学び」がこれからの図画工作には求められ、作品主義や放任的な授業から脱却した指導への意識改革が問われているのである。

今後の課題として、まず１つ目はアンケート結果から「思い通りにいかなかった」という思いをもつ児童への手立てが十分ではなかったことも明らかになったので、どのタイミングでどのように支援していくかを考えていくことだ。２つ目は、児童にとって魅力ある創造する楽しさの質を高めていける題材や授業づくりを研究していくことである。

児童へのアンケートの最後に自身に向けて一言という項目を作った。その回答の中で「先生の授業ももっとバージョンアップさせていってください」というものが数点あり、目を引いた。「私たちも成長したので先生の授業も成長させてね」という児童からのエールでもあり、「今の授業で満足しないでね」という要望にも受け取れた。指導者である限り、絶えず授業改善を行っていかなければならないことを児童たちから教えられた。これをしっかりと胸に刻んでおくことにする。

謝辞

本研究を行うに当たり、S 小学校校長先生はじめ各方面の先生方に格別のご配慮・ご指導をいただいたことに心より感謝いたします。

文　献

[1] 文部科学省ホームページ：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第 197 号）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1

380902_0.pdf　（アクセス日：2019 年 8 月 11 日）
[2] 学研総合教育研究所：小学生白書 web 版 2018 年 9 月調査「小学生の日常生活・学習・自由研究に関する調査」7.学習について　好きな教科・嫌いな教科 https://www.gakken.co.jp/kyouikusouken/whitepaper/201809/chapter7/01.html（アクセス日：2019 年 8 月 5 日）
[3] 鳥原正敏著：図画工作の教科観に関する一考察－冊子「図画工作とは－教科を考える－を通して－」．都留文科大学研究紀要 第 85 集, p.74 (2017)
[4] 石川秀香：学校教育における美術・造形的な活動の教育性に対する考察－図画工作科の系譜と教科観について－．玉川大学教育学部紀要 第 17 集, p.18 (2017)
[5] 井ノ口和子著：「図画工作科の教科観」の転換に向けて －初等科教育法（図画工作）の取り組みを通して－．共栄大学研究論集 第 16 号, p.114 (2018)
[6] 文部科学省：小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 図画工作編．日本文教出版, p.132 (2018)
[7] 同上, p.10
[8] 福田隆眞砂 福本謹一 茂木一司編：美術科教育の基礎知識．建帛社, p. 4 (2010)
[9] 岡田京子著：成長する授業．東洋館出版, p.168-173 (2016)
[10] 阿部宏行編：平成 29 年版小学校新学習指導要領ポイント総整理 図画工作．東洋館出版社, p.6 (2017)
[11] 奥村高明編：小学校教育課程実践講座 図画工作．ぎょうせい, pp. 20-26 (2018)
[12] 阿部宏行編：前掲書, p.10
[13] 同上, p.85

論文集「人と環境」Vol. 12 (2019)
大阪信愛生命環境総合研究所編

＜図１－９＞

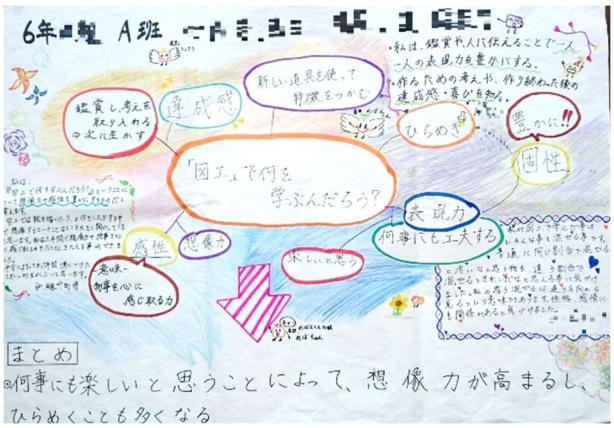

図１　Ａグループ

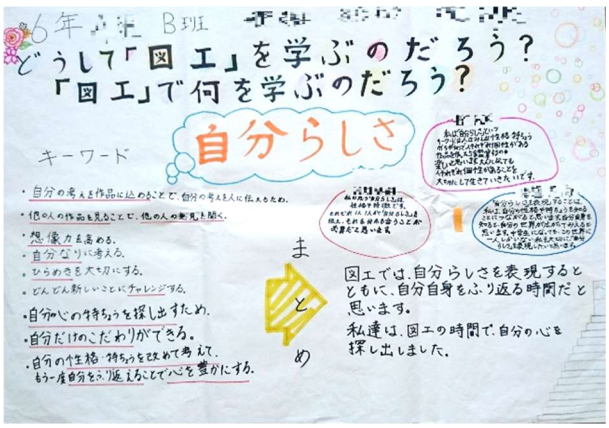

図２　Ｂグループ

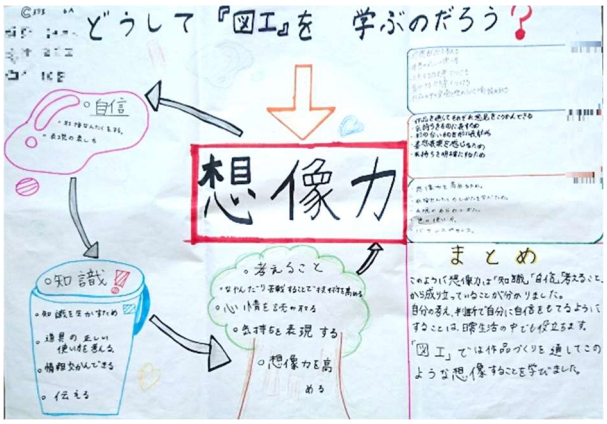

図３　Ｃグループ

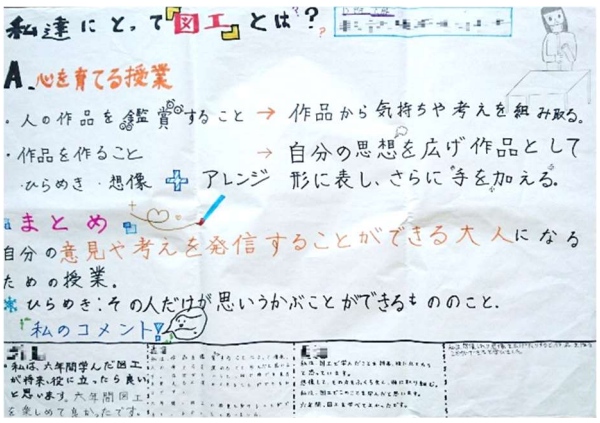

図４　Ｄグループ

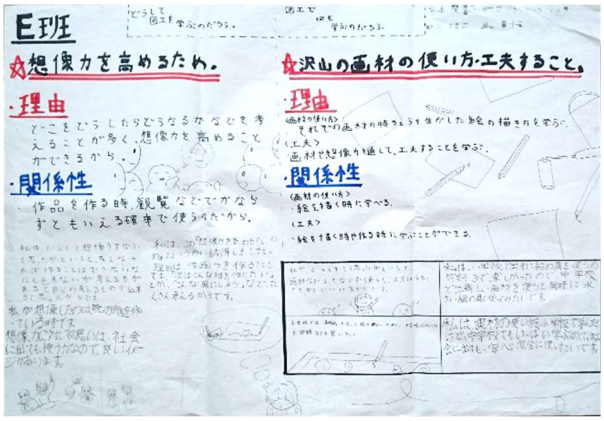

図５　Ｅグループ

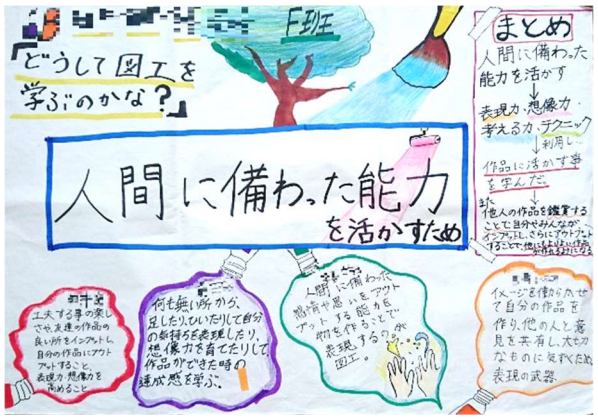

図６　Ｆグループ

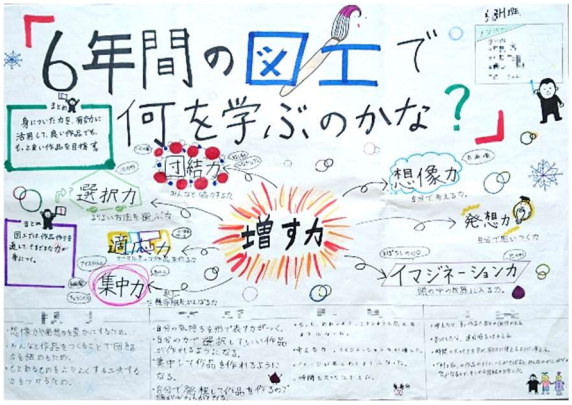

図７　Ｇグループ

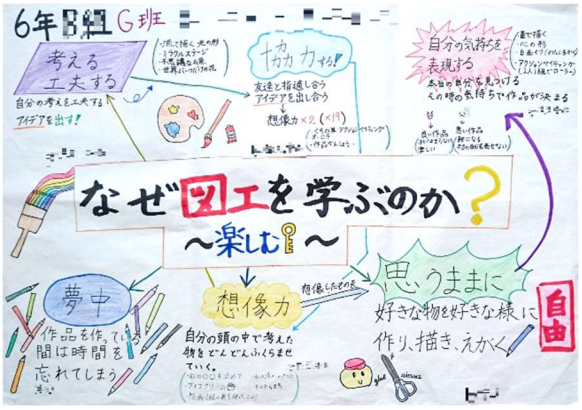

図８　Ｈグループ

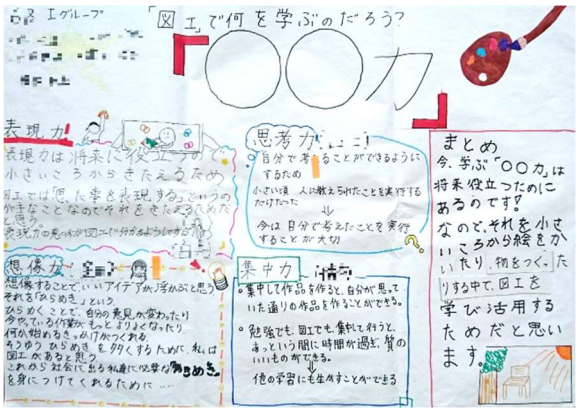

図９　Ｉグループ